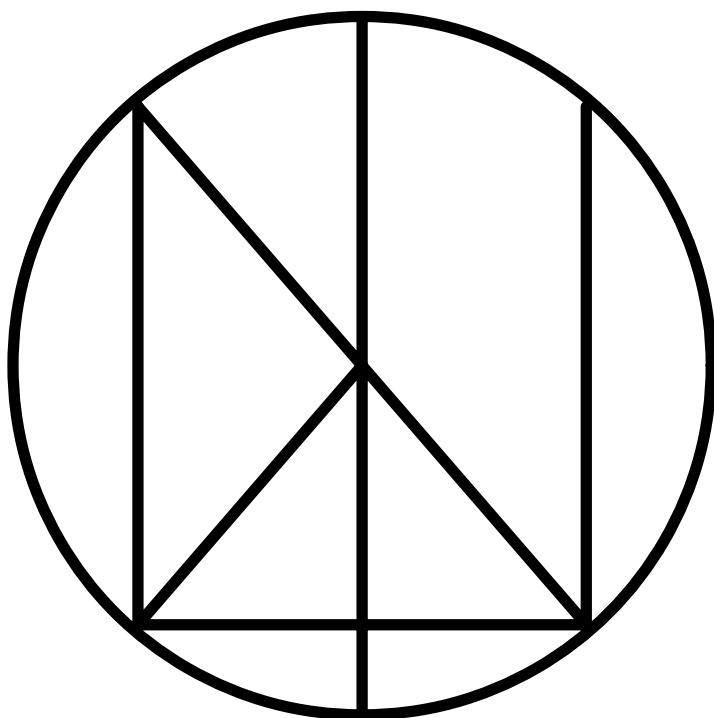


イデオンかるた

解説書



あ

^{あい}愛しあう

ことさえできた

はずなのに



第38話「宇宙の逃亡者」より

身近な人や好意を持った人を立て続けに殺されたシェリルにとって、バッフ・クランは憎い敵だった。にも関わらず、バッフ・クランのギジェと愛し合うことになった彼女は、地球の人々とバッフ・クランの人々とがわかり合えるという事実の体現者であり、両種族が戦う理由すらなかったことにも気がついてた。

しかし、そんな彼女の思いとは関係なく、イデは自らの意思を示そうとしていた。

い

いと
こ
愛し子を
やど
宿せたカララが
にく
憎かった



「THE IDEON 発動篇」より

父の期待に応えるために女としての幸せを捨てたハルルにとって、自由奔放なカララの生き方は望んでも得られるものではなかった。そのカララの軽率な行動がロゴ・ダウの異星人との戦端を開き、それが自分の想い人であるダラムの死に直結したにも関わらず、その張本人は姉である自分を殺して愛する男との間にできた子を産むと言う。

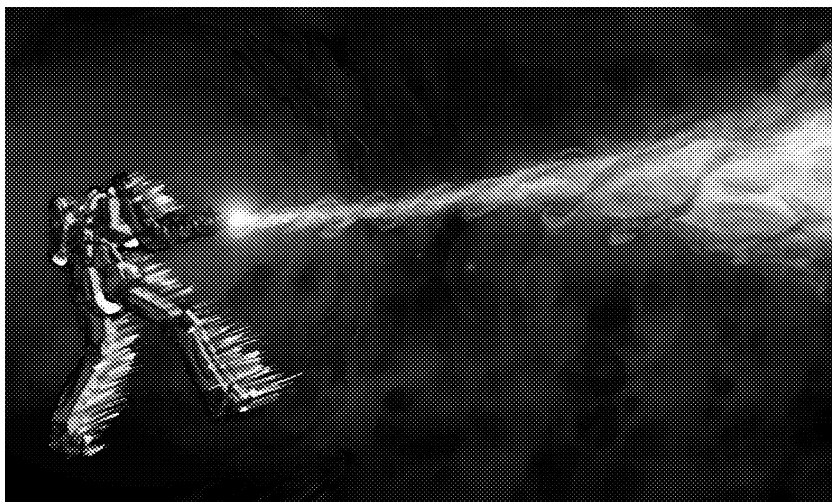
怒りにまかせて実の妹を撃ち殺したハルルは、自分から女の幸せを奪った父にこそ、本当の気持ちを吐露せずにはいられなかった。

う

^{うずま}
渦巻きに

すべて^の飲み込^こむ

^{はどう}
波導ガン



第28話 「波導ガンの怒り」より

ソロ・シップの機関部に隠すように置かれていたイデオン用と思われる武器。後に「波導ガン」と呼ばれるようになるそれは、イデオン腹部から放出されるマイクロブラックホールを前方に集約して発射する大砲だった。

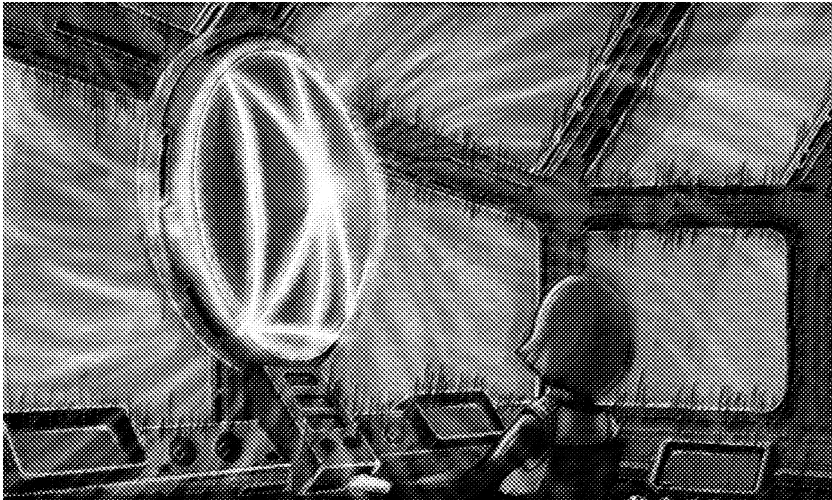
その砲門から放たれた巨大な渦に飲み込まれたバップ・クラン艦隊は、潮汐力に引き裂かれながら事象の地平線の彼方に消えてゆく以外の選択を許されてはいなかった。

え

えん なか
円の中

あらわ
現れたのは

もし
ギリシャ文字？



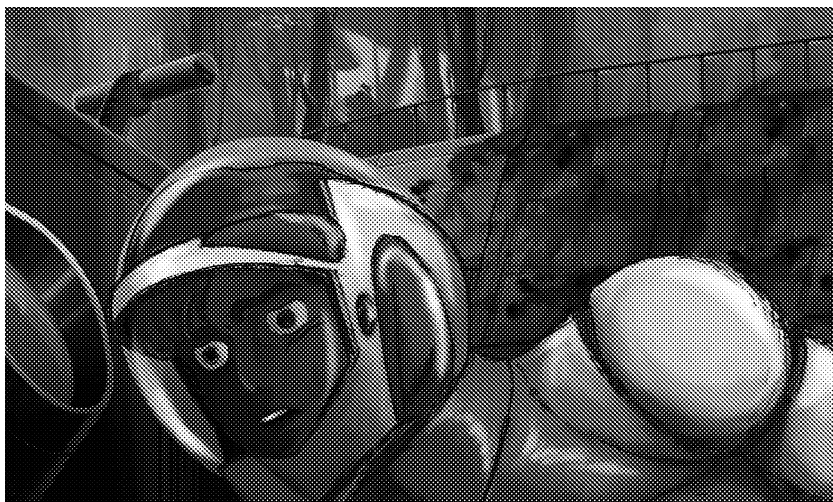
第1話「復活のイデオン」より

それまで動く気配すら見せなかった第六文明人の遺跡が、バッフ・クランの攻撃に呼応したかのように突然動き出した。その時三台の遺跡メカに搭載されていた円形のゲージには、ギリシャ文字風のパターンで「IDEON」という文字が、そして後にドッキングゲージと呼ばれるようになる操縦席横のディスプレイには同じく「IDE」の文字が現れていた。

イデ、それはバッフ・クランが追い求めた無限エネルギーの名だった。

お

^{おれ}俺はまだ
^{なに}何もやっちゃあ
いないんだ



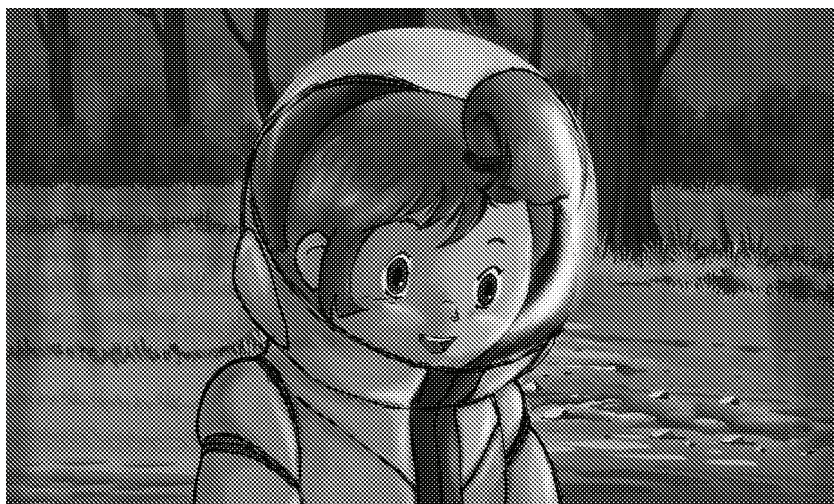
「THE IDEON 発動篇」より

死に際して、自分の人生に満足できる者はどれくらいいるのだろうか。ソロ・シップのハタリは、そうでない側の一人だった。バッフ・クランに追われ、さんざん宇宙を逃げまわった拳句に頭を撃ち抜かれて死ぬ。そんな理不尽で満足というには程遠い死に方を受け入れられる者などいるはずがない。

「死」の先に何が待っているのかを知る由もない、無知で無力な人という生き物だからこそ…

か

カララはね
そらうへのうへから
み
見ているの



「THE IDEON 発動篇」より

ハルルに顔面を撃ちぬかれて死んだカララの胎内ではまだ赤ん坊が生き続けた。赤ん坊がまだ生きてると知ったアーシュラは、その赤ん坊メシアが生まれた時死んでしまったカララにそれがわかるのだろうか心配する。

その問いに、カララは星になって空から見ているから大丈夫なのだと言ったカーシャは、忍び寄る絶望の中で必死に自分と戦っていた。

き

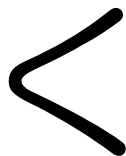
キッチンの
よ寄りそう仕草^{しぐさ}
いと愛^{いと}おいしい



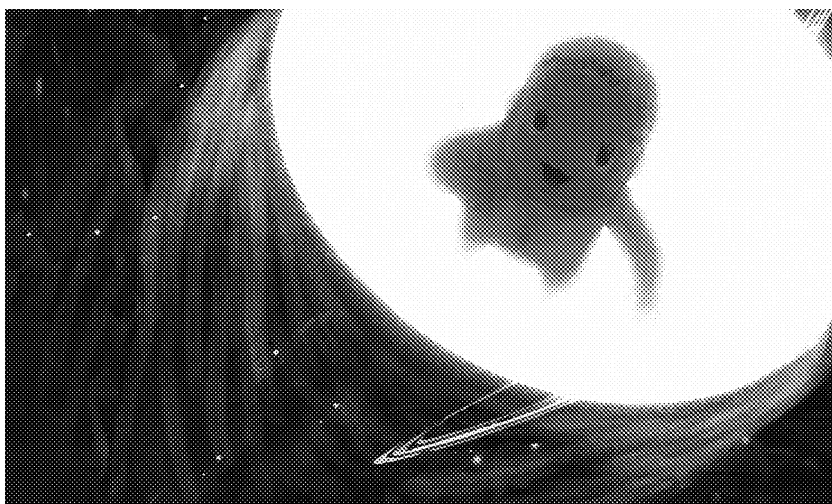
「THE IDEON 発動篇」より

ソロ・シップがいることでキャラルが攻撃されるなら出て行って欲しいと言わざるを得ない。それが正しいと考えていたキッチンに、ソロ・シップの人々も自分たちと同じ立場なのだということを理解させたのはコスモの涙だった。コスモに寄りそってくれるまでに心を許したキッチン。

しかし、コスモにとって何より幸せなその瞬間が、残酷な形で終わりを告げるまでに残された時間は、あとわずかだった…



くかえ
繰り返す
りんねは
輪廻の果てに
ひ
いつの日か



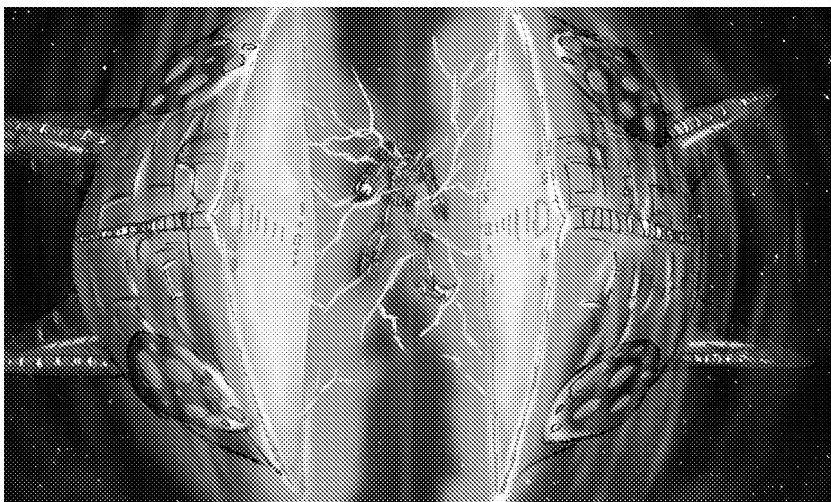
「THE IDEON 発動篇」より

第六文明人の意志の集合体であるイデに芽生えた自我は、地球やバッフ・クランの人々を滅ぼし、新しい知的生命体の元を手に入れた。

そこから生まれる新しい生命は、イデの無限エネルギーを善き力として発現させてくれるのか、それとも何度生まれ変わっても、知的生命体であるかぎり、その深い「業」からは逃れられないのか。それはイデ自身にも答えることのできない問いだった。

け

ゲル^{けっかい}結界
のうさいほう
脳細胞を
^{はかい}
破壊せよ



第29話「閃光の剣」より

イデのパワーの源が人の考える力なら、パイロットの脳を破壊してしまえばイデオンを無力化できる。そう考えて投入されたゲル発振機によるゲル結界は、一時的にイデオンのパワーをダウンさせることに成功した。

しかし、偶然イデオンに乗り込んでいたルウを守るために発動した新たな武器「イデオンソード」は、ゲル発振機を搭載したブラム・ザンとバルメ・ザンを瞬く間に撃沈していた。

こ

こうそく
光速に
ちか そくと
近い速度で
せま く
迫り来る



第18話「アジアンの裏切り」より

バッフ・クランの対惑星兵器「準光速ミサイル」が植民星アジアンの防空網をたやすく突破した。

ほぼ光速で飛来するそれを迎撃することは事実上不可能であり、ひとたび着弾すればその莫大な運動エネルギーによって核融合すら誘発し、小さな衛星であれば軌道を変えてしまうほどの威力に、アジアンの地表は為す術もなく蹂躪され、みるみるうちにその形を変えてゆくのがあった。

さ

さあメシア

おし
教えておあげ

い行く みち道を



「THE IDEON 発動篇」より

因果地平で、メシアが産声をあげた。異星人同士であるベスとカララの間でできたその子は、両種族がわかり合えるという証左であり、イデ発動を抑える鍵でもあった。

しかし、娘を汚されたとしか思えないカララの父ドバの「業」によってイデは発動し、人々の魂は因果地平に漂うこととなった。その魂を導き、新たな知的生命体を生み出すためにメシアは生まれ、新天地に向かおうとしていた。

し

しんせい
新星の
パワー^{あつ}集めた
ガンド・ロワ



「THE IDEON 発動篇」より

超新星「タウ・クスイ・クオリ」の放射エネルギーを蓄積し、荷電粒子ビームとして発射する超巨大兵器ガンド・ロワ。その威力は40%の出力でさえ、惑星を消滅させるほどであったが、遠距離射撃ではイデオンとソロ・シップを殲滅することはできなかった。

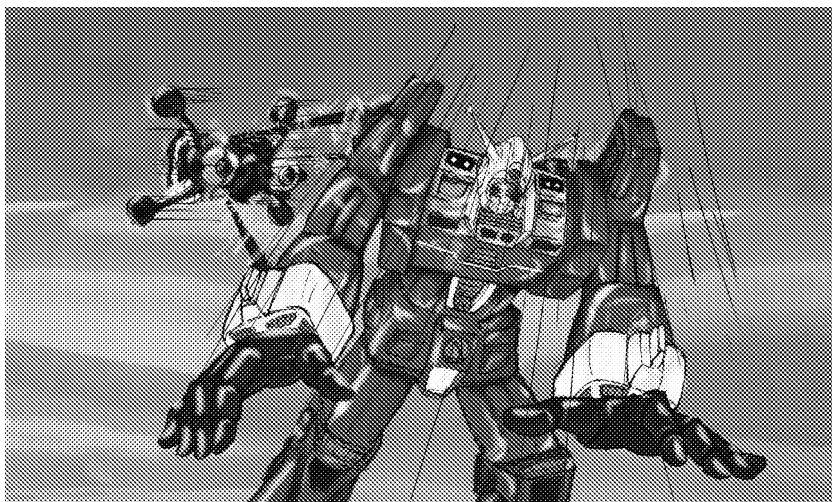
そしてイデオンに直撃した第二射と、ガンド・ロワを両断したイデオンソードとが相打ちになったその時、イデが発動した。

す

吸い^す尽^くせ

巨^{きよじん}神のパワーを

そのメカで



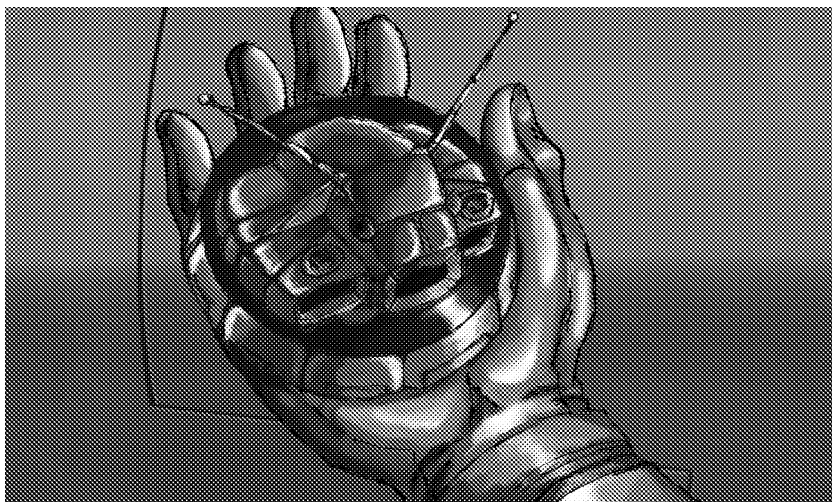
第31話「故郷は燃えて」より

無限エネルギーといえども、放出量が供給量を上回れば一時的にでも無力化できるはず。そう考えて戦線に投入された、イデオンのエネルギーを吸収しつつ放出する機構を持つ重機動メカ、アブゾノールは、その目的を達したかに見えた。

しかしソロ・シップに着艦したことで急激に増大したイデオンのエネルギーは、アブゾノールの吸収能力をはるかに上回っていた。

せ

せいたい
生体が
いばしょし
居場所知らせる
はっしんき
発信器



第32話「運命の炎のなかで」より

事実上無限大と言っても過言ではない広大な宇宙で、バッフ・クランがソロ・シップを追尾できる理由、それが生体発信器だった。微生物「クワロング・トモロ」の雌が、雄に対し時空を超えて発するテレパシーを受信することによって相手の場所を特定するその装置は、ソロ・シップの位置を正確に伝え続けていた。

そして、ギジェの進言によってすべての生体発信器が除去されて安心したのも束の間、今度はソロ・シップ自体の発する時空震が敵に居場所を知らせてしまうことになるのだった。

そ

ソロシップ

かな うちゅう
哀しき宇宙の

とうぼうしゃ
逃亡者



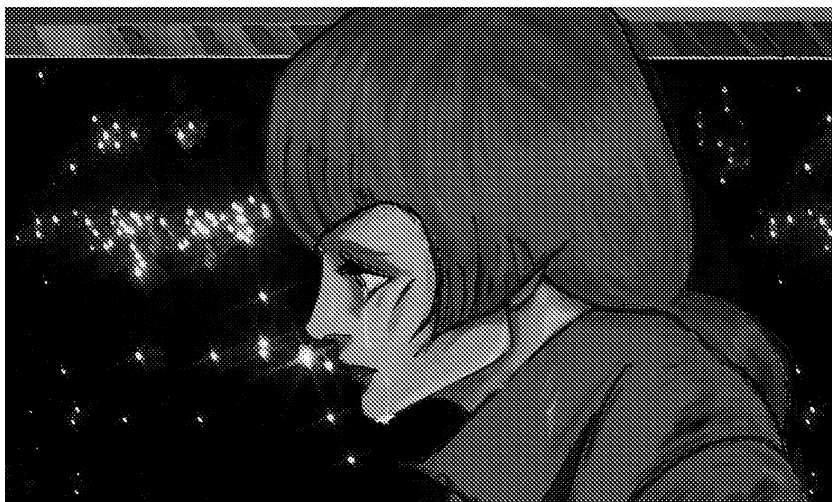
第38話「宇宙の逃亡者」より

バッフ・クランの追い求める無限力を秘めた遺跡をたまたま発掘してしまったために、宇宙を逃亡することになったソロ・シップ。その逃亡劇は、追うもの追われるもの双方に多数の犠牲を強いたがゆえに、終わらせることができなくなっていた。

自分の大切な人を殺されたという強い思いは、和解して協力するという解決策にたどり着くことを拒否する理由として、十分なものであったから…

た

たす
助けてと
すがれる^{ひと}男は
もういない



「THE IDEON 発動篇」より

実の妹を惨殺したという事実はハルルの身に重くのしかかっていた。しかし、ここでバッフ・クラン正規軍司令官の立場を放棄するわけにはいかず、父であり総司令であるドバに対し、自ら軍の指揮を執ると宣言したものの、彼女がひとりの弱い人間であることに変わりはない。

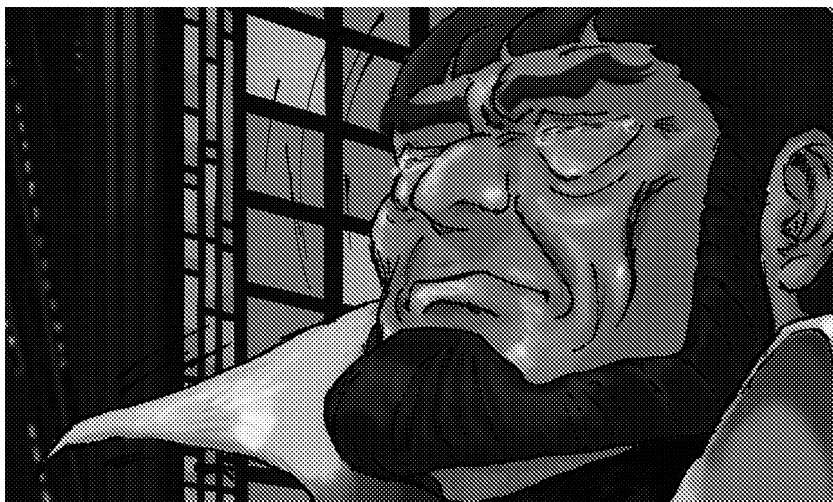
ドバを見送ってひとりきりになった部屋で、ハルルは涙を流しながらダラムに助けを求める。しかし、今の彼女を救ってくれたであろうただひとりのその人は、もういなかった。

ち

ちちおや
父親の

この悔^{くや}しみを

だれ^しが知る



「THE IDEON 発動篇」より

ハルルが男であればという悔しみ、カララが異星人の男に汚されたという悔しみ、それがドバの父親としての悔しみだった。

その、誰にも言うことのできない、誰にもわかってもらえない悔しみをロゴ・ダウの異星人にぶつけるということを密かに決意したドバであったが、その意志そのものが彼らを滅びへと導くことになるのだった。

つ

つか
使わぬよ
ぐん めんつ
軍の面子が
あるのにな



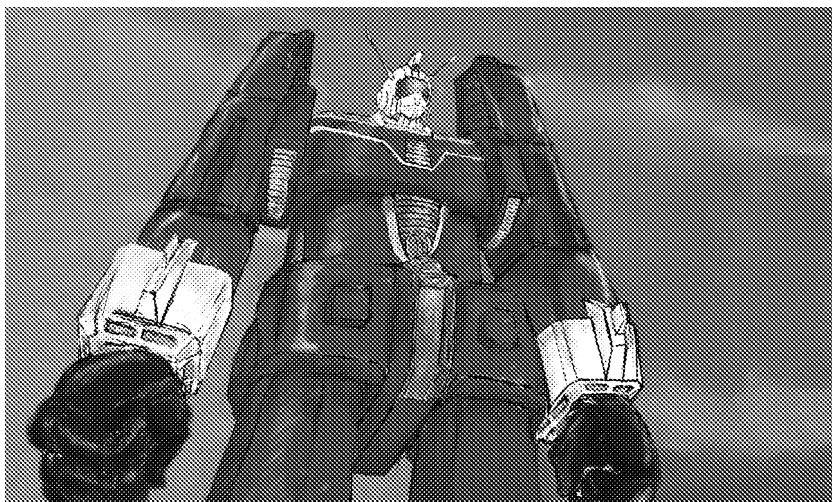
第37話「憎しみの植民星」より

バッフ・クラン正規軍にとってガンド・ロワは最後の切り札である。それを使っても敵を殲滅できなかったとすれば、それは軍の敗北を意味する。だからこそ、おいそれと使うことはできない。

しかし、オーメ財団のギンドロ・ジウムに「ガンド・ロワを使わないのか」と問われ、軍の面子を理由に「使わぬ」と答えたドバには、近い将来、最終兵器をなりふり構わず使うことになるという予感があったのかもしれない。

て

でんせつ
伝説の
きょしん すがた
巨神が姿
あらわ
現した



第1話「復活のイデオン」より

突然動き出した三台の遺跡メカは、それに乗り込んでいたコスモたちも気づかぬ間に合体し、巨大な人型メカになっていた。バッフ・クラン戦闘機の攻撃を難なく跳ね返し、さらにそれを撃墜した人型メカはその場に二本の足で立ち上がる。

それを見て伝説の巨神を連想したマヤヤは恐れて走り去り、カウラはあまりにも機械的なその姿を、伝説の巨神とは認められずにいた。

と

とうとつ
唐突に
てんそう
転送された
てき ふね
敵の旗艦



「THE IDEON 発動篇」より

多くの目撃者の眼前でソロ・シップから忽然と姿を消したカララとジョリバが再び姿を現したのは、バッフ・クラン軍の旗艦、バイラル・ジンの中だった。

思わぬ場所に対峙することになったドバとカララ。その場でカララはベスの子を妊娠していることを明かし、バッフ・クランと地球人が分かり合えること、休戦すべきであることを主張するが、父親としてのドバには、異星人に汚された娘を許すことすら到底出来る話ではなかった。

な

な
泣くルウが
イデのパワーを
ひ
引きあ
上げる



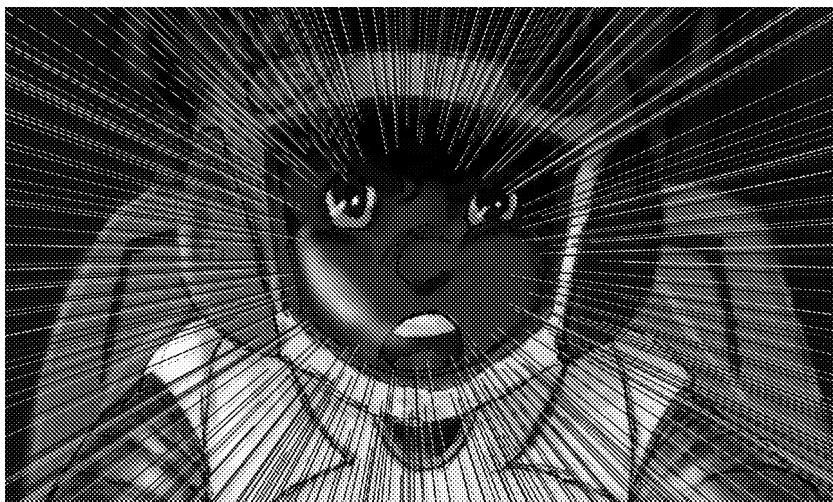
第33話「ワフト空域の賭け」より

ワフト空域で鉱物生命体ヴァンデにエネルギーを吸収されて窮地に陥ったイデオンであったが、ルウが泣くことによって発動したイデオンソードがそれを救った。

すでに、赤ん坊であるルウの純粋な防衛本能がイデのパワーを増大させることは明らかであったが、ルウの自我が目覚めはじめたことによって、エネルギーの供給が不安定になっていくのだった。

に

にく
憎しみの
こころ た
心を絶やす
そのために



「THE IDEON 発動篇」より

イデは、自らを善き力として発現させてくれる、善き知的生命体を求めている。そのために、悪しき知的生命体である自分たちを滅ぼして新しい知的生命体の元を手に入れようとしているのだということは、地球人側、バッフ・クラン側の共通の認識であった。

それがわかっているにもかかわらず闘いをやめない彼らは、すでに後戻りできないところまで来てしまっていた。

ぬ

ぬ だ
抜け出して
よそ おんな
異星の女に
か つく
借り作る



第15話「イデオン奪回作戦」より

植民星ダボラスターがソロ・シップを受け入れてくれるという連絡は、バッフ・クランの罠だった。ベスの反対を無視し、カララを人質にとってまでソロ・シップを脱出したシェリルたちは辛くも帰還したが、ソロ・シップ内の不和の種となるのは明らかだった。

カララが、自分が首謀者だと名乗り出ることによってそれを回避することはできたが、そのせいでソロ・シップの全員がカララに大きな借りを作ることになってしまうのだった。

ね

ねえ
姉さんを
ころ
殺して産みます
ベスの子
を



「THE IDEON 発動篇」より

カララの宿した赤ん坊、イデ発動の鍵を握るであろうその子を守ることが、ソロ・シップクルーの最優先事項となっていた。それは勿論カララにとっても同様で、姉ハルルと対峙したその時に発した「ロゴ・ダウの異星人ベスの子を産みます」という言葉は、実のところ「宇宙を守ります」と同義であった。

しかしそんな事情を知るはずもないハルルは、身勝手な妹に、ただ怒りを募らせるだけだった。

の

の^こ乗り越える

ことなどできぬ

ひと^{ごう}の業



「THE IDEON 発動篇」より

地球人にせよバッフ・クランにせよ、人としての業を乗り越えることなど到底できそうにない。ならば、そんなものに縛られない、新しい知的生命体を自らの手で作り出そうとするイデの行動原理は、理にかなったものである。

そのことに思い至ることができたドバは、業にまみれた自分自身を客観的に分析できる、稀有な人物でもあった。

は

はじ
始まりは
せけん し
世間知らずの
こうきしん
好奇心



第1話「復活のイデオン」より

すべてはカララの軽率な行動から始まった。バッフ・クラン正規軍総司令ドバ・アジバの娘である彼女が独断でソロ星に降り、その探索に向かった兵士が恐怖と焦りから戦端を開いてしまったというのは動かしようのない事実だった。

そして、この戦闘によって発動しようとしたイデが、ルウが泣いたことによって、それを一時的に中止したのだということを、その場の人々は知るはずもなかった。

ひ

ひみつり
秘密裡に
けいやく むす
契約結ぶ
てきどうし
敵同士



第37話「憎しみの植民星」より

アジアンへの攻撃を回避したいコモドアと、ソロ・シップを手に入れたいドロンの中に密約が結ばれた。人質と引き換えに、ソロ・シップの引き渡しを求めるコモドア。

そして、人質の中にいたシェリルの妹リンの命を威嚇の弾丸が奪った時、シェリルの中で何かが崩れた。その後さらに続く悲劇は、シェリルの心に大きな影を落とすことになるのだった。

い

ブリッジ
艦橋に
きよじん
巨神が^{せま}迫る
そのわけは



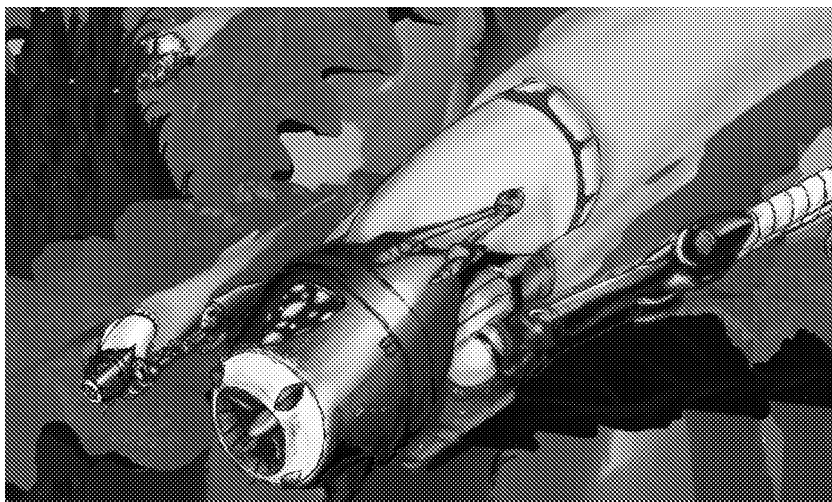
「THE IDEON 発動篇」より

ドバにはわかっていた。イデの巨神が迷いなく、真っ直ぐにバイラル・ジンのブリッジに向かってくるのは、バッフ・クランの業を一身に背負った自分の居場所を、イデが巨神に教えているから。

そしてそれを教えるのは、イデが、イデの求める理想の知的生命体には程遠い自分たちを根絶するために、殺し合いをさせようとしているからだということが。

へ

ベトベトの
は葉っぱに^{てき}敵を
さそ^こ誘い込め



第38話「宇宙の逃亡者」より

機動性の高いアディゴの足を止めるため、スティッキンスターに生息する巨大植物の、粘着性の高い葉に誘い込む。周りの環境を利用して戦況を自らの優位にすることに長けたギジェの戦術は、十数機のアディゴを撃破することには成功した。

しかし圧倒的な物量で迫るアディゴ隊はイデオン各機を徐々に追い詰め、ついにカーシャのソル・コンバーがアディゴに取り付かれてしまった。

ほ

ほし^{ほし}を^わ割る

これこそイデの

はつげん^{はつげん}
発現か



第38話「宇宙の逃亡者」より

ソル・バニアーのバリアと装甲を破ったアディゴの過粒子砲がギジェの体を買いたその時、操縦者の意思とは関係なく合体したイデオンの両腕から発生したイデオンソード。そのエネルギーの奔流は、周囲のアディゴ隊と惑星を貫通した先のバッフ・クラン艦隊を屠り、さらには惑星そのものを両断していた。

それはギジェが、自らの誇りを捨ててまで見たいと切望した「イデの発現」に他ならなかった。

ま

^{まね}真似をして
キスするはずが
にらめっこ



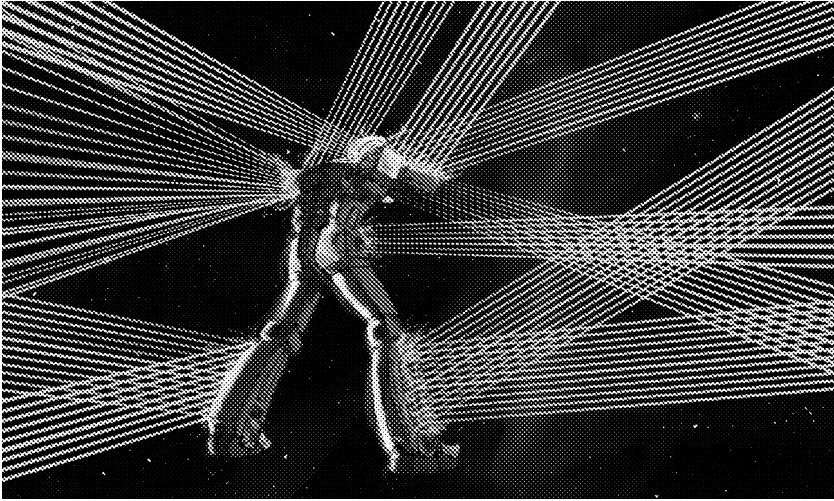
「THE IDEON 発動篇」より

最終決戦が間近に迫っている今、コスモに好意を示すことをカーシャが躊躇する理由はなくなっていた。カララとベスがキスをする場面を目撃したカーシャはコスモにキスをせがみ、コスモもそれに応じるが、二人のヘルメットが邪魔をして、ただ顔を見合わせるだけという結果になってしまう。

その続きが因果地平まで持ち越されてしまうことを、今の二人はまだ知らなかった。

み

ミサイルの
いっせい はっしゃ
一斉発射で
てき う
敵を撃つ



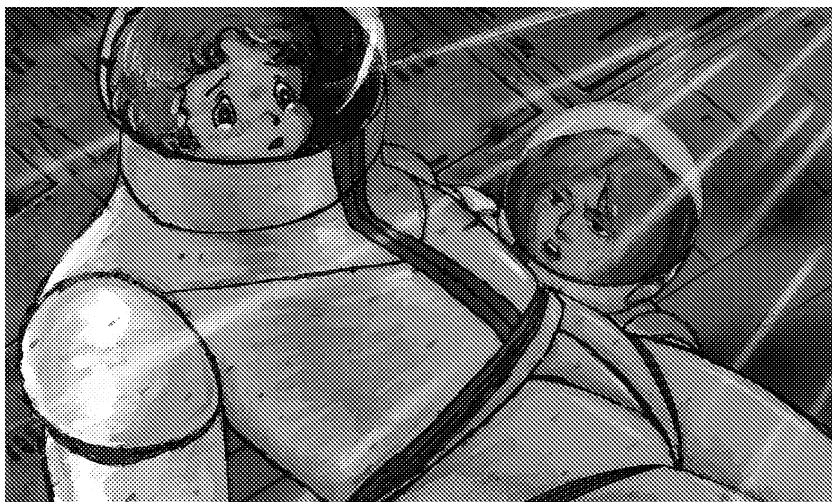
第14話「撃破・ドク戦法」より

バッフ・クランの攻撃による恐怖で心を病んだコスモを、優しく母親のように癒してくれたカミュラ・ランバン。その彼女の命が、自分の眼前でバッフ・クランに奪われた時、コスモの怒りは頂点に達した。

コスモの怒りに呼応して増大したイデのエネルギーはイデオンから一斉発射されたミサイルをもパワーアップし、周囲の敵を一瞬にして殲滅していた。

む

むく
無垢な子の
おそ
怖れの心に
こころ
こた
応えなさい



「THE IDEON 発動篇」より

イデのエネルギーの源が生物の純粋な防衛本能だとシェリルは考えていた。そうだとすれば、人を死なせてしまうことは、イデのエネルギー源を失ってしまうということになる。

彗星の迫るソロ・シップの甲板で、人を生かすのがイデのなすべきことだと叫ぶシェリルであったが、イデが彼らを滅ぼそうとする理由は、彼女の考えも及ばぬところにあった。

め

め まえ
目の前を
す
好きなあの子の
こ
くび と
首が飛ぶ



「THE IDEON 発動篇」より

ソロ・シップをおびき寄せるための囷として攻撃にさらされたキャラル星でコスモが出会い、恋心を抱くようになった少女、キッチ・キッチン。再び始まったバッフ・クランの攻撃がキッチンに直撃するのを目撃したコスモの眼前を、彼女の首だけが血の尾を引きながら通り過ぎて行った。

その壮絶な体験がコスモの精神を崩壊させなかったのは、彼があまりにも多くの死に立ち会ってきたことと無関係ではなかったのかもしれない。

も

もろともに
死ぬと^{かくこ}覚悟の
ダラム・ズバ



第30話「捨て身の狙撃者」より

失敗を重ね続けたダラム・ズバがサムライとしての意地を貫くには、できるだけ多くのソロ・シップクルーを道連れに自爆するという方法しか残されていなかった。

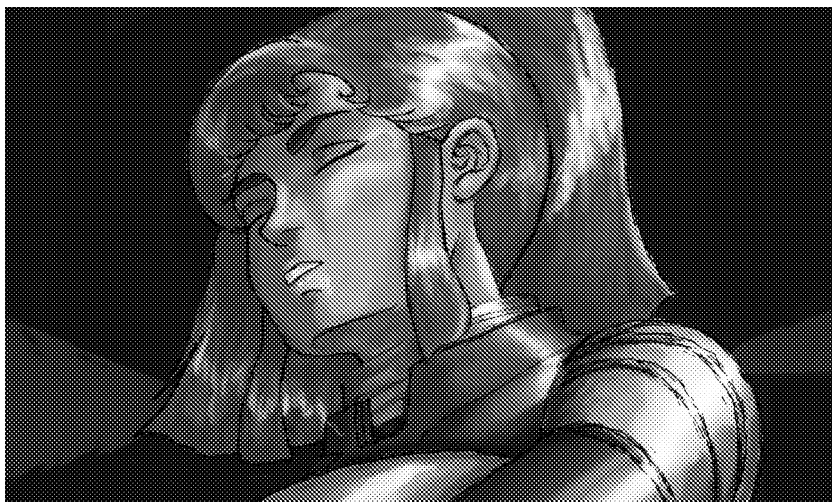
宇宙服に核爆弾を仕掛けたうえで一対一の決闘を申し込み、それをコスモが受けた時、彼の目論見は達成されたかに見えたが、彼の誤算は、部下が核爆弾のことを暴露したこと、そして、イデの発現とは何かを知ることにかかわったギジェがソロ・シップのクルーに紛れ込んでいたことだった。

や

やす
安らかな

ねむ
眠りはコスモが

いればこそ



第38話「宇宙の逃亡者」より

バッフ・クランに追われステッキンスターに逃げ込んだソロ・シップクルーたちは、最終決戦が迫っていることを予感していた。最後になるかもしれない休息のときカーシャが選んだのはコスモと一緒にいることだった。

ソル・アンバーのシートで無防備に眠り込んだカーシャに毛布をかけてやったコスモの「何故自分たちはこんなことをしているのか」という問いは、答える者もなく虚しくコックピットに響くだけだった。

ゆ

ゆいごん
遺言を

わら
笑ったお前は

ゆる
許さない



第32話「運命の炎のなかで」より

補給艦のスタッフとしてルクク・キルの前に現れたクララは、実はハルル直属の部下だった。クララからダラムの遺言の存在と、それをルククが笑ったことを知らされたハルルは、クララに遺言の奪還とルククの暗殺を命じる。

女としてハルルに同情したクララは戦闘中のブリッジでルククの暗殺に成功するものの、艦自体がイデオンの波導ガンにより大破、クララの命もダラムの遺言も永久に失われることになるのだった。

よ

よ ^{たんじょ}
善き男女
^{ものごと}
物事すべて
^{たんじゅん}
単純だ



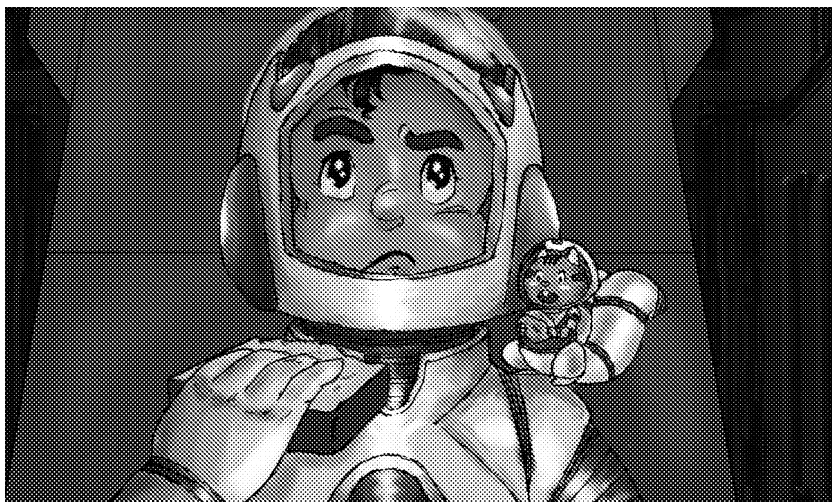
「THE IDEON 発動篇」より

因果地平でコスモとカーシャを見つけたドバは、ズオウ大帝に「イデ発動の中心にいた者たち」と紹介した。それに対しズオウは彼らを「善き男女」と評する。

死んだことでイデの意図が理解できた身であればこそ最後まで生き残ってイデ発動の中心にいた者達ならば、イデの認めた「善き男女」なのであろうと考えるズオウも、すでに善悪の区別を超越した場所にいた。

ら

ラパパとも
これが最後の
食事かな



「THE IDEON 発動篇」より

「俺、死ぬかもしれないのに、何で食ってるんだろ」
コックピットに向かいつつラパパとともに食事を摂るデクがつぶやいたひとは「生命体は何のために生きるのか」という問いと同義であり、造物主以外には答えることはできないものだった。

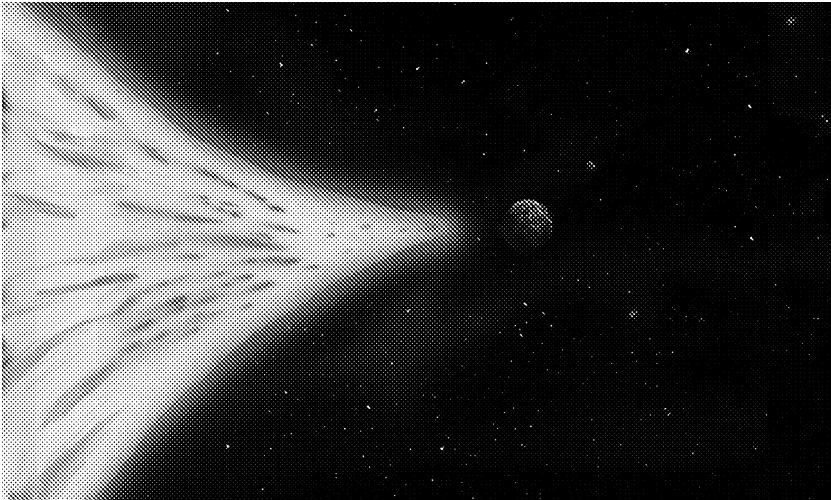
そして今、造物主に近い力を生命体によって与えられたイデは、その問いの答えを考える意味さえも無に帰そうとしていた。

り

りゅうせい
流星の

お
落ちる果てには

あお
青い星



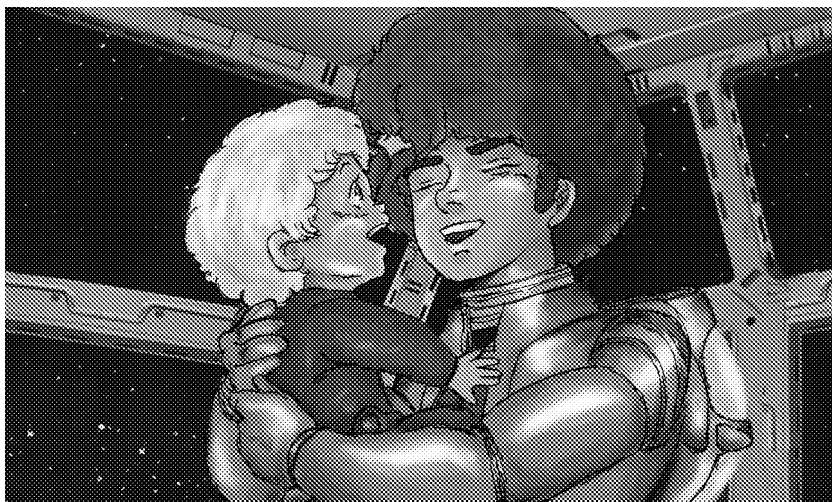
「THE IDEON 発動篇」より

人知れずソロ・シップから生み出される流星。それは地球人とバッフ・クランを滅ぼすために、イデの放った矢であった。それぞれの種族の本星、植民星に降り注いだ流星はイデの意図通り、地球人とバッフ・クランのほぼすべてを滅ぼした。

そしてイデは、最後に残ったソロ・シップとドバの艦隊を戦い合わせるべく、準備を進めていた。

る

ルウの手が
埋まるコスモの
アフロヘア



第29話「閃光の剣」より

偶然イデオンに乗り込んでいたルウを守るために発現したイデオンソードによって、イデオンの窮地は救われた。純粋な防衛本能によって、その力を増大させていくイデ。

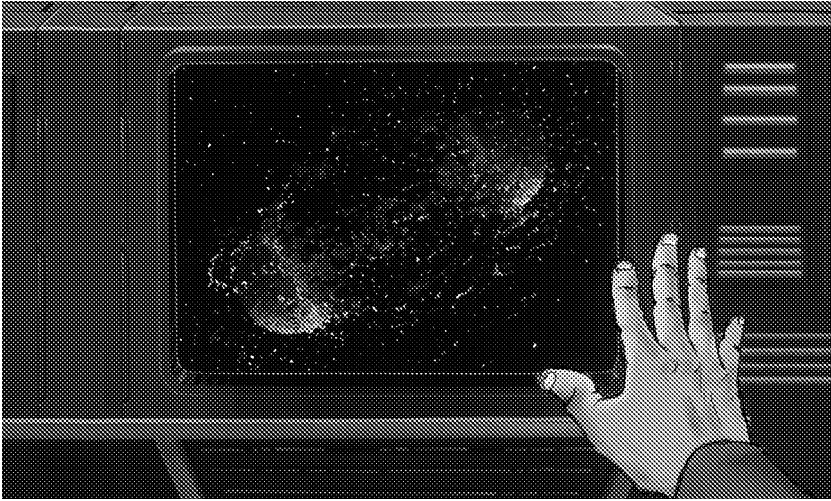
そして、そのエネルギーの源となっているのは、コスモの膨らんだアフロヘアの中には何があるのかと興味津津な、ただの無邪気な赤ん坊であった。

れ

れんらく
連絡の

とだ
途絶えたわけは

れきぜん
歴然と



「THE IDEON 発動篇」より

バッフ・クラン本星と連絡が取れなくなったことを気にするギンドロ・ジナムにドバが見せたのは、星が二つに割れた映像だった。

それが現在のバッフ・クラン本星の姿なのだと納得できず、自分の目で確かめると言い出したギンドロ・ジナムに比べ、冷静に現実を受け入れたドバの考えているのは、バッフ・クランという種族をどうやって存続させるかということだけであった。

ろ

ろくばんめ
六番目

であ
出会ったそれは

むげんりょく
無限力



第5話「無限力・イデ伝説」より

宇宙に飛び出した地球人類は、ソロ星の遺跡を発見するまでに五度、知的文明との出会いを経験していたが、未だ彼らと対面するまでには至っていなかった。

六度目の出会いであるソロ星の遺跡を作った知的生命体に「第六文明人」と名付けた人々は、その遺跡が無限力を発現するものであること、そしてそれを追い求める第七文明人、バッフ・クランとの出会いが直後に待っているとは、まだ知る由もなかった。

わ

^{わたし}
私たちが
^い
生きてきたのは
なんのため？



「THE IDEON 発動篇」より

コスモは気づいた。イデは、自らを善き力として発現させてくれる新しい知的生命体の元を手に入れようとしている。そしてそのために、自分たちやバッフ・クランを滅ぼそうとしているのだ、ということに。

それは、カーシャのみならず、この宇宙に存在するすべての生命体が生きてきた意味そのものを否定する、残酷な、そして冷徹な宣告であった。

を

^{ふきつ}
不吉さを
その^み身にまとう
ザンザ・ルブ



「THE IDEON 発動篇」より

白骨を想起させる姿と、白色がバッフ・クランにとっての徹底抗戦を意味することとが相まって「死」そのものをまとうかに見える重機動メカ、ザンザ・ルブ。

その機体に搭乗したハルルが、ソロ・シップで出会った妹カララを射殺してしまうという結果を引き起こしたのは、ザンザ・ルブのまとう「不吉さ」故であったのかもしれない。